

交流集会「放射線診療における困難事例への 看護ケアに関する検討会」

Opinion exchange meeting on nursing care difficult cases in radiological treatment

松成 裕子¹ 新川 哲子² 今村 圭子¹

浦田 秀子² 大石 景子³

Yuko MATSUNARI¹ Tetsuko SHINKAWA²
Keiko IMAMURA¹ Hideko URATA² Keiko OHISHI³

- 1 長崎大学大学院医歯学総合研究科
- 2 鹿児島大学医学部保健学科
- 3 長崎医療センター

- 1 Nagasaki University Graduate School of Biomedical
- 2 Kagoshima University Faculty of Medicine School of Health Sciences
- 3 Nagasaki Medical Center

医療現場では急速に発展した放射線診療における患者、家族への日々の看護ケアにおいて、対応が困難となる事例や困難な対応を看護師に求められるケース、起こりうる事象について、話題提供から参加者との意見交換により、解決ができればと交流集会を企画した。

まず、話題提供者は、長崎医療センター看護師であり、がん放射線療法看護認定看護師、長崎大学大学院医歯学総合研究科災害・被ばく医療科学共同専攻を修了した大石である。このコースには、放射線看護の専門看護師を目指すものがあり、現在、日本看護協会の専門分野の特定を目指している。そのため、長崎、弘前、鹿児島の3大学で連携し、学生の大学院在学中から専門看護師としての自立を目指し、自ら専門看護師の役割を果たすべく人材となれるように支援をおこなってきた。そして、大石はこの交流企画の場を自ら教育プランとして立案し、実施した経緯がある。今回の事例は、80代の大腸がん、肺がんの治療歴がある男性が骨腫瘍を指摘され、入院となり、今後の治療方針を決定するうえで原発巣の断定が必要と判断されPET-CT検査を行う予定となった。これは、事例検討会用として自ら経験から作成したものである。集会では、この困難事例の対応を参加者間のグループワークによって検討してもらい、発表する形式とした。検討内容は、「患者や家族への看護師の関わり方や看護ケア内容について」、「多職種間の連携方法、連携者同士の対応について」、「被ばくと防護」であった。参加者のほとんどが放射線看護の実践看護師であり、事例の問題点を難なく抽出し、意見交換が行われた。大石からは、患者の思いの代弁者としての役割が看護師には求められる、倫理的視点をもった倫理調整により、患者や家族に意思決定を支援すること、患者の疼痛管理については、PET薬剤業者、薬

剤師等の多職種により対応することが提案された。さらに、放射線看護の専門看護師の役割として、「介助者、周囲の人への被ばくについて」の対応策が提案された。交流集会の最後は、がん放射線療法看護認定看護師である緑川弘子さんから、幾度となく困難事例に対応した経験をもとに「患者への思い」、そこからくる素晴らしい対応を含んだコメントにより、会を閉めることができた。参加者の多くから満足のいく評価が得られ、放射線看護の発展が増々期待できること、「放射線防護」という放射線看護の専門看護師が果たす役割について焦点が当たり、活躍の場面が明らかになった。